



持ちで、順番を決めるのにも苦労した。

女、子供は動力船に、男は和船に乗り動力船に引き船することに決まったが、やはり限られた人数しか乗れないため私達は結局九月十一日によりやく船を見つけることができた。

この時、二十年間苦労を重ね築き上げた生活の場を一度に失うということは、腹を切れと言われた思いだった。

長男が後の船となり、一家は乗船した。船は夜を待ち無事出航したかに思えたが、一時間後にソ連の監視艇に遭遇。明かりを消し停船、探照灯で照らした。その間皆一言の言葉も出ない。一時間ほどでソ連の監視艇は去り、また全速で走る。監視艇がくる。停船……

波が出てきた。船長は南東方向に進路を変えた。この場合遠廻りをしては仕方無いとのことだ。

海峡半ば頃、白々と夜が明け、和船で密航している船が見える。その船を引船している動力船の船足は遅くなる。見える人だけを引いた船に移し船は捨てる。波が高く、乗換も限度と船長は判断した。船を見る船長は泣い

ている。乗っている皆も泣いている。見捨てられた船の人も泣いている。

かすかに北海道の山々が見えた。皆泣いて喜んだ。船長が、「枝幸沖だがこの風では枝幸港は無理だ。進路を西に、鬼志別か稚内にする。」と言う。波間から北海道の山々が見え隠れする。誰も一睡もしていない。幸い子供たちが泣き叫ばず頑張ってくれたことが皆の励ましになった。

鬼志別に来たが、やはり波があつて近寄れず、稚内へ行くことにする。船長はそれも駄目なら砂浜を選び乗り入れるという。皆は無言で浮きになるものを選び始めた。年輩者が船長に何やら相談をしているようだ。この風ではもう少し岡寄りを走ることになる。

船はもう北海道の目の前まで来ているというのに……

気は焦る。が、ここは船長と二、三人の年輩者に任せられるほかない。船長に持ってきたにぎり飯を渡す者もいる。引かれた船の者は水さえ持っていない。

山が見えてから五時間たった頃、いくら波が楽に

なつたような気がした。船長は、この先は浅瀬があるの  
で少し沖を走ってみると言う。波は以外と静かになっ  
た。皆一安心し、船長の顔にも笑いが洩れるようになっ  
た頃、大岬燈台が見えてきた。引かれた船の者も万歳を  
して船長の苦勞に応えている。

皆、誰に言うともなく「有り難う、有り難う。」と言っ  
ている。「助かったんだよ。」と、子供の頭を撫でている  
母親がいる。皆腹をすかしているのに気付き、にぎり飯  
を分けあって食べている。

午後三時過ぎに稚内に着いた。狭いところに閉じ込め  
られていたので、皆足がしびれている様子ですぐには岡  
に上がれない。金の支払いその他の用を済ましている  
と、弥満方面の定期船の船長に会った。船長から聞いた  
話によれば、ある引き揚げ船が留萌沖で撃沈されたこ  
と、方々で密航船が遭難にあったことなど聞かされ、私  
達の幸運さと遭難者のあわれさとして皆涙が止まらなかつ  
た。

それぞれの行き先を話し合い、健康でまた再会するこ  
とを誓い合い大恵丸の船長に有り難う、とは言葉では言

い表すことが出来ないほど感謝の気持ちを込めて見送  
り、これからの苦勞を胸に秘め個々の行き先に向かっ  
た。

## 樺太から砂川へ

北海道 日浦 トミ

私は、昭和七年真岡より十キロ離れた広地郡、天茂泊  
の日浦家に嫁ぎました。その後男の子三人に恵まれ平和  
に暮らしておりました。しかし昭和二十年に私達一家の  
生活も戦争のため一変しました。八月十五日終戦のラジ  
オを多くの人とともに聞き全員が共に悲しんだ。終戦か  
らの樺太が本当の戦場になりました。

八月二十日は朝三時から私の村も艦砲射撃で私は小学  
校四年生、一年生、一歳の乳呑み児をつれ、主人は八十  
二歳になる父を背負いたくさんの人と共に逃げました。

浜辺を歩いたり、近くの山の中へはいったり、大勢の人  
と逃げ廻っているうちに主人と父がいらないのにびっくり